2024年1月21日 久宝教会 降誕節第4主日礼拝メッセージ

「水がめに水をなみなみと」　　水谷憲牧師

聖書　ヨハネによる福音書 2章 1－11節

イエス・キリストの故郷であるガリラヤのナザレから、北に約20キロほど離れたカナという地で、一つの婚礼が行われていました。本日一緒にお読みした聖書には、それが誰の婚礼であったのかは記されてないんですけれども、イエスの母も、イエスも、そして弟子たちまでもがそこに招かれたと書かれているところ。さらに、イエスの母がぶどう酒の心配をしたり、召使に何やら言いつけていたり、まるで彼女が自ら裏の台所で働いているかのような様子を見ると、これはイエスやその家族、特にイエスの母マリアと非常に親しい人物の婚礼であったのかもしれません。イエスの親類であったのだろう、とも言われているわけですけれども、本日の聖書は、イエスがその婚宴の裏で、水がめの水をぶどう酒に変えるという奇跡を行われた、という話を伝えています。

婚礼などのお祝いの席でお酒がふるまわれるのは、現在はもちろん、このイエスの時代の昔も一般的であったようですが、もともとぶどう酒というのは、婚礼などのお祝いの席に限らず、ごく普通の飲み物として広く一般に飲まれていたものであったようです。だいたいどこの家にもあって当たり前の飲み物だったということでしょうか。ですから、そのようにだいたいどこでもあって当たり前であったぶどう酒を、ましてやお祝いの席で切らしてしまうというのは、ちょっとありえない、あってはならないことだったわけです。

しかし、あってはならないことであろうとなかろうと、実際にぶどう酒は足りなくなってしまった。何とかしなければならない。母マリアはイエスに「ぶどう酒がなくなりました、もうぶどう酒がありません」と相談しました。別にイエスがそんなこともあろうかとぶどう酒を持参してきていたわけではない。勝手知ったる知人の家、「あぁ確か階段を下りて行った下にまだストックがあるはず」などとイエスがぶどう酒のありかを知っていたわけでもない。それなのに、何で母はぶどう酒のことをイエスに相談するのか。きっとイエスの母は、イエスが生まれた時からの様々な不思議な出来事を思いめぐらせていたのでしょう。今は降誕節です。クリスマスを過ぎてそんなに間がありませんから、皆さんも覚えておられることと思います。天使ガブリエ

ルがマリアのところに突然やって来たときのこと、ベツレヘムの飼い葉おけに寝かされた、生まれたばかりのイエスのところに羊飼いたちや東方の学者たちが訪れたこと、イエスを殺そうとするヘロデから逃れるために、家族でエジプトに避難した時のこと、また、神殿でシメオンという老人やアンナという年老いた女預言者に祝福されたときのこと、イエスが12歳の頃、エルサレムで迷子になったときのこと、そんないろいろなことを思い返すと、きっとイエスなら何とかできるのではないか、何とかできるかもしれないというふうに思えたのかも知れません。理屈ではなく、感覚で、直感でそう感じたのでしょう。

それで母マリアはイエスに「もうぶどう酒がなくなりました」とそれとなく相談してみたというわけですが、それに対して、なんとイエスは、「女よ（婦人よ）、私とどんなかかわりがあるのです」。自分の母親をつかまえて「女」「婦人」呼ばわりです。これだけ聞くと、非常に冷たい言葉のように聞こえてしまいますが、よくよく考えると、まあそりゃそうだわなと。何でそんなこと私に言うの。ぶどう酒がなくなったのは分かったけど、私には関係ないでしょう。しかし私はこのイエスの一見冷たそうな言葉に、逆にイエスの人間臭さを感じるわけです。今日の話は、イエスが弟子たちを何人か集めた後、初めての奇跡・初めてのしるしを行われた話、つまり、イエスがキリストとして、宣教者として歩みを始めた初めてのエピソードなんです。だからでしょうか、神様によって送り出されたメシア・救い主として歩み始めたばかりのイエスの未熟さというか、そのようなものを私はこのイエスの言葉に感じたわけです。

福音書を見渡すと、イエスの生涯において、食べ物に関わる奇跡の記事といえば、例えば5000人にパンと魚を分け与える記事と、このカナの婚礼の記事があげられるわけですが、この2つの記事の違いは、そこに集まった人々がイエスの話を聞くために集まった人々であったか、そうでなかったかというところにあるように思われます。つまり、イエスがなぜ先ほどのようなそっけない言葉を発したのかと言うと、今日のこの婚礼に集まった人々は、イエスのために集まった人々ではなかった、イエスの言葉を求めていた人々ではなかったために、いわゆる奇跡の安売りをすることにイエス自身が違和感、あるいは嫌悪感を抱いたのではなかったか。私は単に場を和ますため、飲み物を出すために父なる神から遣わされたのではな

いのだ。私が来たのはみんなにワインを飲ませるためではない。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。私が来たのは、地上に平和をもたらすためではなく、火を投ずるためだ。剣をもたらすためだ。わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。私が来たのは、神にまだ立ち返っていない人たちにぶどう酒をふるまうためなんかじゃない！ 私の時はまだ来ていません！ 私の出番はまだです！・・・私には、宣教を始めたばかりのイエスのこのような一本気な、まじめな気持ちが感じられるわけです。そして私には、このようなあまりにも生真面目な気持ちこそが、この活動初期のイエスの、キリストたる者として世に迎合してはいけない、へつらってはいけない、自分が人間臭くあってはいけないと必要以上に自分自身にプレッシャーをかけてしまうという人間臭さであり、ある意味での未熟さでもあったように思えます。めっちゃ肩に力が入っているような印象です。

しかし、そうかと思えばイエスは、そのすぐあとに、水がめの水を6つすべてぶどう酒に変えてしまうんです。一つの水がめが2ないし3メトレテス、1メトレテスが39リットルということですから、約100リットル、6つの水がめですから、合計600リットルです。750mlのワインボトルだと800本分です。いやでも、さっき「私とどんなかかわりがあるのです。私の時はまだ来ていません」とかイエス様は言っておられたのに、どういうことなんでしょうか。

このことについて私は想像するのですが、イエスは、ぶどう酒など私には関係ない、今はまだ私の働くときではないなどという冷たいことを言ってはしまったものの、その一方で、この婚礼に集った人々の楽しんでいる様子や、また主賓や客人に楽しんでもらえるように、みんなの思い出に残る良い会になるように、と裏で走り回っている母や召し使いたちの様子を見ているうちに、イエス自身の考えを改めさせられたのかも知れません。自分がこれから人々に伝えようとする福音とは何なのか。全ての兄弟姉妹・仲間たちと、痛みも喜びも、あらゆることを共に分かち合っていく中で、初めて理解できていくもの、初めて伝わっていくものなのではないのか。

イエスは召し使いたちに「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われました。今日は婚礼なのだ。主賓の2人を神様が結び合わせてくださったことを共に感謝

し、喜び、そして2人の将来、2人がこれから歩んでいく道が、希望と喜びにあふれたものになるように、また辛い試練に見舞われようとも、2人で力をあわせて乗り越えていけるように、共に祈りを合わせ、励まし、送り出すための集いなのだ。イエスが足りなくなってしまったぶどう酒を水がめ6つもの量をもって差し出したのは、イエスがこれから人々に伝えていこうとする福音、「喜ぶ人とともに喜ぶ」という福音のためであり、また婚礼の主賓2人と、この婚礼のために喜びと祈りをもって集った人々、また、この婚礼を良いものにしようと裏で支えている人々、すなわちこの場に集ったみんなのためであったからでしょう。

イエスはこのカナの婚礼にて、「喜ぶ人とともに喜ぶ」という福音を、身をもって、しるしをもって初めて証したわけです。きっとイエス自身も、自らの福音ののべ伝え方について、新たにひとつ学ばされ、成長させられた出来事だったのではないでしょうか。そして、言葉だけ、口だけでなく身をもって福音を証するイエスだからこそ、多くの弟子たちが彼を信じ、彼に従っていったのでしょう。「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」とはまさにこのことを指しているようにも思えます。

私たちも、喜ぶ人とともに喜ぶキリストに倣って、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と呼びかける人でありたい。また、それに応えて水がめに水をなみなみと注ぐ人、つまり隣人への共感の輪を広げていくことのできる者となりたいと思います。